

インパクトコンソーシアム データ・指標分科会（第3回） 議論のポイント

【日時】 令和7年4月18日（金）13:00～15:00

【場所】 オンライン開催

【次第】

1. 事務局説明
2. 座長・副座長からの成果物に対するメッセージ
3. ディスカッションメンバーからの成果物に対するコメント
 - 3.1 パネルディスカッション① 企業
 - 3.2 パネルディスカッション② 投資家
 - 3.3 有識者からのコメント
4. 事務局連絡

【座長・副座長からの成果物に対するメッセージ】

- 本報告書では、インパクトを創出する事業や投資について、実務に即した説明ができるよう、体系的かつ現実的な整理ができたのではないかと。特に、「目標特定」「計画策定」「成果評価」の各場面で、実践的にまとめられている。
- インパクト・データベースの案内板は決定版ではなく、今後のさらなる発展に向けた出発点と位置づけられる。少子高齢化や健康といった、特に、先進国・日本で議論となるテーマも盛り込みながら、国際社会に対して有意義な提案を発信していけるような取組となることを期待している。
- データや指標に関しては、サステナビリティの分野において従前から議論されてきた一方で、近年新たな動きやイノベーションも加速している。そうした流れの中で、全てのデータを一箇所に集約するのではなく、官民の様々なデータベースを整理することで繋がっていくようなインパクト・データベース案内板のコンセプトは、近年の課題意識に即した提言であると考えている。また、案内版の構築はあくまで手段であり、それ自体を目的化しないように留意しつつ、来年度以降も議論を継続していきたい。
- 当分科会においては、なぜインパクトの特定・測定・管理に取り組む必要があるのか、どのようにインパクトを捉えて企業価値に結び付けているかという観点から議論ができたと感じている。同時に、テクニカルな議論も大事であり、新しい視点で分析することで、社会全体に影響するような取組に繋げることも考えられる。
- 第2回分科会の会員からのアンケートの中で、「テクニカルな企業評価の手法ばかりではなく、夢と希望を語るべき」という激励の言葉をいただいたが、大きなビジョンの議論とテクニカルな議論を往復することを通じて、夢や希望の

ある話に繋げていけるのではないか。

- 企業と投資家との対話は1対1で行われる場合が多いが、そこで考えるべき対象は、サプライチェーンの中で関わる様々な人々や、環境・地球へのインパクト等、多岐に渡る。これらのインパクトを事業の中に組み込んでいくことが、21世紀の資本主義の中で求められていると感じる。
- インパクト・データベースの案内版については、試行錯誤を繰り返しながら、継続的な更新と改善を図る必要があると考えている。

【ディスカッションの概要】

(1) パネルディスカッション① 企業

<分科会にインプットした内容>

- ステークホルダーごとの関心の違いや、自社製品が社会に与えるインパクトを含めた企業の「社会的価値」について紹介した。
- 企業が対外的にインパクトを示す方法の一例として、自社の環境面での貢献を金額換算する取組について紹介した。これにより投資家との対話のきっかけが増えてきていると感じている。
- 自社がインパクト評価に取り組む意義として、自社が生み出す根源的な価値を可視化することで、従業員の働きがいの向上や、事業ポートフォリオの最適化にも繋がりを紹介した。

<分科会の議論の中で自社の取組に活用できそうなこと>

- これまでは、環境の切り口でインパクト可視化に取り組むことが多かったが、分科会で他社の多様な取組を知ることで、社会課題解決の切り口でも考えられるのではないかと気づきを得られた。
- 分科会のアンケート調査の結果から、企業に求められている社会的価値について気づきを得られた。今後は、GHG 排出量のような「規定演技的な指標」と、個別案件における地域のニーズに応じた社会的価値のような「自由演技的な指標」の2つの側面からインパクト評価の事例を積み上げていきたい。
- 企業は独自の価値を示したいと考える傾向にある一方、投資家は企業間比較ができるような共通のインパクト指標を求める傾向にあるという話が印象に残っている。両者の認識が異なっている中、企業と投資家との間で認識をすり合わせる過程がよいダイアログの土台になると思うので、自社においても取り組んでいきたい。

<インパクト・データベースの案内板の活用可能性>

- インパクト・データベースの案内板のベースとなる報告書別紙で紹介された口

一カル SDGs プラットフォームは、社内の担当者に情報共有したところ、地域におけるインパクト創出を検討する際の材料となりそうだとのコメントがあった。報告書別紙では、ベースライン値特定時に参照できるデータベースとして、海外のデータベースも整理されたことがよかった。今後海外事業におけるインパクトを検討する機会があれば、参考にしたい。

- インパクト・データベースの案内板は、自社の事業が創出するインパクトをどのように測定・評価すべきか検討する際に活用できると考えている。投資家・企業の双方から関心・納得度の高い指標が開発されていくことも期待している。
- ステークホルダーとの対話においてはストーリーの形で自社の取組を伝える必要がある中、インパクト・データベースの案内板から、そのストーリーに使えるアイデアを得られるのではないかと期待している。

(2) パネルディスカッション② 投資家

<分科会にインプットした内容>

- IMM は、「企業が主体のもの」と「投資家が主体のもの」が存在し、目的も多岐に渡ることを紹介した。これを踏まえた議論を経て、インパクト・データベースの案内板は、単に指標の標準化を目指すのではなく、企業や投資家が必要な時に必要な指標を参照できるものを目指すという方向に進んでいったと思う。
- 機関投資家の立場から、①インパクトウォッシュとならないようにインパクトを評価する際の考え方の整理が必要であること、②インパクトに関する企業開示は限定的でありロジックモデル全体の情報の取得が難しいこと、③企業によるインパクト会計の情報とインパクトファンドとして取得する情報には共通点と相違点があることを紹介した。
- 投資先企業のインパクトは個別性が強いと1社ずつ話し合っ指標を設定してきた一方、上場株式、債券、ローン等を含むポートフォリオ全体におけるインパクト創出の観点では比較可能性も求められる。インパクト・データベースの観点においても、これらのバランスを取ることが重要ではないか、という視点を共有した。
- インパクト投資の実践者として、①インパクト会計の意義や方法、②インパクト指標の標準化と企業の独自性とのバランスの重要性について紹介した。その中で重要な点として、企業のステージや規模に応じたインパクト情報の開示、企業経営の意思決定に有用なインパクト指標の設定、インパクト指標に関する企業と投資家の対話、課題の当事者・受益者の意見の反映等について共有した。

<分科会の議論の中で自社の取組に活用できそうなこと>

- 国内外に様々なデータベースがあることを改めて確認したことで、インパクト

評価を行う際に、複数の物差しを参照し、よりよいものを見つけるという使い方ができるのではないかと感じた。

- ローカル SDGs プラットフォーム等、様々な有益なデータベースがあるという気づきを得られた。他方で、現実には実務家は忙しく、明確な動機がなければ、個別のデータベースを細かく参照しようとはなかなかならないため、活用促進に向けては工夫が必要である。
- グローバルで活用されている SDGs や IRIS+は、必ずしも日本の文脈に沿っていないところ、当分科会において紹介された SDGs ローカル指標は日本版の指標になっており、有用であると感じたので、ぜひ活用していきたい。また測定したインパクトとベースライン値との比較についても取り組んでいきたい。インパクトの測定や社会課題の構造的な把握においては AI の活用も考えられる。
- ローカル SDGs プラットフォームの情報も活用しながら、投資家として社会課題に対してどのような貢献をしていきたいのか、ストーリー性を持って示していきたい。

<インパクト・データベースの案内板の活用可能性>

- 国内外において様々なデータベースが存在するが、必ずしも周知されているわけではないため、それらを整理して紹介することには意義があると考えている。ただし、完全なものを作ることはできないので、社会全体の共有知識として更新していく必要がある。
- インパクト・データベースの案内版は、企業や投資家が課題をより細分化・具体化して捉え、課題への理解を深めるためにも利用が広がってほしい。例えば英国では、貧困問題という大きな問題の中でも、所得が低いという理由だけで生活において追加的なコストの支払いを余儀なくされるという問題が具体的に認識され、この追加的コストが、学術研究において「貧困プレミアム」という名で指標化され、追加的コストの推計、すなわちデータ化が行われている。この指標・データに基づいて、貧困プレミアムの解消を目指すインパクトファンドが誕生したという実例がある。課題を具体化し、データ・指標を明確化することで、新たな取り組みに繋がる可能性があることを示唆している。
- 多くの企業にインパクト・データベースの案内板を活用いただき事例を積み上げていくことで、GHG 排出量以外の項目においても、普及や開示が進むことを期待している。企業との対話の際に参考事例として案内板を紹介することで、企業に対しインパクトの開示を促していくことができるのではないかと。
- インパクト・データベースの案内板によって、日本特有の課題に関する情報収集やインパクト評価が効率化されることに期待している。また、データを持っている企業自身がインパクト・データベースの案内板を活用した上で、投資家が活用しやす

いように工夫することが必要である。

(3) 有識者からのコメント

- 伝統的な評価学で使われてきたインパクトに関する言葉は、近年多様な意味で使われているところ、多様な立場の方が集まる場で言葉の意味や考え方が整理されたことは有意義であった。
- インパクトと企業価値・株価との関係性を研究する中で、株価に統計的に有意なインパクト指標は、ストーリーとしての納得性があるものの、それほど多くはないと感じた。インパクト・データベースの案内板には多様かつ膨大な指標がリストアップされるので、どの指標が企業価値にリンクするかという問いに対する答えが一層求められる。多くの企業の活用事例が整備されることで、投資判断への活用や、企業価値との関係性の分析も進むのではないかと考えている。
- 指標は具体的な行動計画のための道具であり、これを活用する際にはストーリーに乗せていくことが重要である。実際に使われている指標を経年で集めていくと、注目されている課題の傾向をつかむことができる。今後様々な指標に関する情報が顕在化し、よりオープンに議論されることを期待している。
- 情報を作る側と使う側の情報の非対称性がある中、企業・投資家・アカデミアを含む多様な立場の方が集まる場でデータや指標について議論ができたことは、有意義であった。インパクト・データベースの案内板にはデータベースの情報が集約されていることから、これを参照することで、次に整備すべきものが見えてくると考えられる。その意味では案内板は次に行く方向を指す羅針盤と言えるのではないか。